

## 第十回 最初の竹山の日々(三)

次に竹山に来れることができたのは、ほぼ二週間後であった。

道路や家の周辺の雪は十センチほどで除雪はそれほど大変ではなかったが、今度は寒さだった。翌朝の最低気温はマイナス十八度で、そこまできると普段は賑やかな小鳥たちの姿もほとんど見られず、シジュウカラが二羽来たぐらいでシンとして凍りついた静かな風景だった。

S市のまちなかではあまり記憶にない寒さだと思っていたら、二日後の朝にはマイナス二十一度まで下がった。晴れた日の朝は、放射冷却現象とかで気温がグッと下がるのだ。

そのかわり、厳寒の快晴の朝空はどこまでも透き通り、遠くの山並みが朝日を浴びてくつきりと普段より大きく見渡すことができた。

あまりの寒さに怖気付いたわけではないが、次に竹山に来れたのは翌月の半ば過ぎで、三週間以上たつてからであった。冬場、それだけ家を空けているとすっかり冷え切ってしまったてなかなか暖まらない。ようやく家が暖まったのは二日後だった。その日は朝から快晴で、部屋の中に陽が低い角度で差し込みそれが家を暖めてくれた。天気が良いとお客さんも賑やかだ。大きな窓の前をキタキツネが悠然と横切っていた。普通、人の気配を感じ取るとサツといなくなりそうなものだが、ちらつとこちらを見てもまるで何も見なかったようにゆっくり堂々と歩いて立ち去っていった。まあ、こちらの主はそつちななかから当然か。その日は、アカゲラとシマネガが同時に居合わせたりするのも目にする事ができた。

私たちも、天気の良いさに誘われえて隣家の友人から新居祝いにいただいたスノーシューを履き初めすることにした。敷地内をぐるっと一周するくらいだが、それでも結構汗ばみ身体が暖まる。よく見ると、斜面の雪が溶け落ちて土が少し顔を出しているところがあった。本格的な雪解けはまだ一ヶ月以上先になるが、それでも少しずつ季節が変わりつつあるようだ。前回来た一月でいえば元旦の日の出が午前七時三分で、日没が午後四時十二分で、太陽の南中高度も二十四度と低かったのだが、この二月十八日では、日の出が午前六時二十六分で、日没が午後五時一分と太陽が出ている時間がかかなり長くなったし、南中の高度も三十五度と高くなっている。一年の半分近くを雪と寒さに閉じ込められる地域にとっては、そのようなわずかな差でも、また、春に一步一步近づいていると気持ち膨らむものなのだ。

もちろんS市のまちなかにいても、太陽の光が力強さを増しているのを感じられるのだが、竹山に居るとそのことが、生き物たちの動きや場所による雪の融け方などかすかなことからからも感じられる気がした。

そんなことを感じる事ができた二月だったが、結局、竹山に来ることができたのはその四日間だけだった。一月は正月休みを長く取れたので十二日ほど居れたのだが、二月は年度末が近いせいか出張が多く十一日間それに取られてしまったのだ。

